
ダブルクロス ～明の憂鬱～

虎刈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダブルクロス 〈明の憂鬱〉

【Nコード】

N4201I

【作者名】

虎刈

【あらすじ】

ダブルクロスは、「レネゲイドと呼ばれる未知のウィルスの影響で、超人となった主として少年少女たちが、彼らの平凡な日常を守るために非日常の力を駆使して戦う」というテーマ（出典：Wiki pedia）のテーブルトークRPG（TRPG）です。

TRPGについての説明は割愛しますが、本作はそのダブルクロスの世界観を用いた二次創作になります。

TRPGやダブルクロスを知らない方々も楽しめるよう、各話の最後に専門用語等の解説を行なっておりますのでご参照下さい。

本作を閲覧くださり、TRPGやダブルクロスに興味を持っていた
だければ幸いです。

はじめに（前書き）

この「はじめに」では、ダブルクロスの世界観、つまりレネゲイドウイルス（RV）とは何か、そしてRVを巡って対立する組織についての説明をさせていただきます。

はじめに

レネゲイドウイルス（RV）、という言葉がある。

世界中の人間に密かに寄生（※1）していたこのウイルスは、波長の合った者の肉体を知らぬ間に改変させていく。

RVに選ばれ、発症した人間は誰もが超人的な力を手に入れる。それはさながら神話に出てくる怪物や悪魔のような能力で、普通の人間なら張り合う事すらできないものだった。

しかもこのRV発症者——オーヴァード（※2）の厄介な所は、彼らが一見して一般人と見分けがつかない事にある。彼らが意図的に異能を使わない限り、オーヴァードは何の問題もなく日常生活を送っている。

そして裏では、誰にも知られる事なく自由にその能力を振る舞えるのだ。

人は力に魅せられる。

RVの力を悪用しようという組織はたちまち秘密裏に結成され、世界を牛耳ろうとした。

その組織の名は、ファルスハーツ（FH）（※3）。

一般企業だけでなく、各国政府にまでその手は伸びているという。

しかし、闇があれば光もまた存在する。

オーヴァードとなった者を保護し、RVが絡む事件を解決する団体——UGN（※4）も、世界中でその勢力を伸ばしていた。

人に人ならざる力をもたらすRV。

——もしこの存在が公になれば社会は混乱し、破滅に向かう。

そう判断した各国首脳陣は、U G Nを全面的に支援する事で、R Vの存在を一般人から隠蔽する事に成功した。

やがて、人としての道徳を具現化したような組織U G Nと、目的のためには手段を選ばないF Hは、R Vという共通の力を持ちながらも互いに対立する事になった。

もしも、R Vに意志というものがあるのなら、彼らは何を思っているの前に現れたのだろうか。

過ぎた力に翻弄される、愚かな人間を笑うだろうか。
それとも、希望にすぎる儚い人間を、羨むだろうか。

人が、人の身にあまる力を手に入れた時、どう動くのか。
それに伴う悲喜こもごもの、しかし決して他人に知られる事のない舞台。

——ダブルクロスとは、そんな物語である。

解説

※1 「世界中の人間に密かに寄生」

十数年前に、秘密裏にR Vを搭載していた輸送機が墜落し、世界中に撒き散らされたという逸話がある。

※2 「オーヴァード」

R Vによる異能発症者。その中でも特に、力に溺れ、日常生活を

完全に捨て去り、RVに翻弄されるようになったオーヴァードを「ジャーム」と呼ぶ。彼らは人でありながら、獣のようなものである。

※3 「ファルスハーツ(FH)」

違法上等、(知恵・情報等も含めた)力こそ絶対至上という非法組織。世界中に支部があり、RV関連の事件の背後には彼らの姿が見え隠れする事も多い。

※4 「UGN」

オーヴァード発症者を保護して指導したり、RV関連の事件を秘密裏に処理したり、マスコミの情報操作をしたりと、至れり尽くせりな組織である。FHと同様、世界中にその支部がある。UGNはFHと違い、RVと関わった民間からの協力者が得られやすいところに組織拡大の強みがあったと思われる。

はじめに（後書き）

ついにTRPGの二次創作を挙げてしまったなー、と思いつつ。

ダブルクロスはF・E・A・R・（TRPGの会社）がリプレイ（TRPGの会話を読み物としてまとめたもの）やら何やら色々出していますから、今更私が二次創作一つ加えたところでどーってことないでしょう……多分。

ダブルクロスは世界観がラノベ的ですから、そういうノリが好きな人に広く受け入れられているシステムです。だもんで、ダブルクロスの二次創作とかこの「小説家になろう」で探してみたら見つかりますよきっと。

（書いておいて自分で検索、1分後）

……あ、ホントにあった。（自分で言ってみてびっくり）

うわぁい、先駆者がいると俄然プレッシャーがなくなるね！

しかし私は捻くれ者なので、ちょこちょこオリジナルを入れて行く予定です。それも二次創作の一つの形という事で、ご勘弁下さい。

ご意見、ご感想などございましたらお待ちしております。

1、異能

断崖絶壁、下は海。

まるで火曜サスペンスのラストシーン。

でも二人は中年ではない。

与謝野^{よさのえりこ}衿子は地元の中学生、^{てしがわら}勅使河原翔に至っては小学生だ。

追ってくるのも刑事ではなく、何人もの異能者――オーヴァードだ。

もう、奴らの足音が聞こえてきた。

「翔君、久保（※1）なんかより俺の方が強いって、言ったよね」
これ以上言うと、終わりになる。

二人の魔法が終わってしまう。

衿子もそれは分かっていたが、それでも言ってしまった。

「お願い、戦って」

ヒーローは、正体がばれたら最終回。

敵に勝っても、お別れだ。

翔は海を見ながら考えて、悲しそうに言った。

「……俺、戦ってるところを与謝野さんに見られたくない」

翔は不意に衿子の前に来て、彼女の制服のスカートを解いた。
そしてそれを目隠しにして、衿子の後頭部で結んだ。

翔は衿子より頭一つ背が高く、その時だけはずっと大人に見えた。

衿子は抱きつく衝動は抑えたけれど、涙が出た。

――セーラーは、田舎臭くて嫌い。

スカーフとラインが真っ白なのも嫌い。

白だと透けて、目隠しにさえならないから。

翔の魔法が、スカーフ越しに始まった。

草やヒースなど、辺りの植物が衿子の所に集まる。

集まった植物は一本の木に変わる。

衿子には植物の知識がないので、この木の名前が分からない。

木は枝の一つに衿子を座らせて、みるみるうちに成長する。もう学校の屋上より高い。

衿子が見下ろすと、歩いていく翔の背中が見えた。

周りの人間が口々に何か言って、翔の周りを取り囲む。

その後の激しい戦闘と、数刻後の静寂。

やがて、衿子は翔の姿を確認した。

それはもう翔とは呼べる物ではない。

衿子には植物の知識がない。

名前の分からない木の上で、衿子はぼろぼろと泣いた（※2）。

与謝野衿子がF H支部組織の追撃から逃れ、U G Nエージェントに確保されたのはその4分後の事である。

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

静岡県静岡市のUGN支部にて、西本明（※3）は支部長である。
にしもとあきら
 ウーホンエン
 武洪峰（※4）からの召集を受けていた。

「――以上が事の顛末ね。F Hの秘密研究所から逃走した少年は殺害され、たまたま彼を匿っていた少女は少年の計らいで事無きを得、幸運な事に私達が保護できた。もつとも、少年を救えなかったの残念だったね」

やや片言の日本語を話すUGN支部長に対し、西本は頭をかきつつ尋ねた。

「……ウーせんせ。それ、俺が呼ばれたのとう関係があるわけ？」

武は人差し指を立て、これからが重要だと言わんばかりに話し出した。

「少年の能力は、おそらくオルクス（※5）。けども、オルクスの力じゃあんな巨木は作り出せないよ。オルクスに限らず、オーヴァードは『生命』を作り出す事はできないね。できないとされてたんだよ。——コードネーム『DTマスター』、君を除いてね」

その話は前にも聞いた。

明の能力はモルフェウスという、物質を原子レベルで変換させて様々な物質を作り出すものだ。

鍊金術にも似たそれは本来、無機物を作り出す事くらいしかできない。

しかしどういうわけか、明に至ってはこの限りではなかったのだ。彼は無機物のみならず有機物まで生成でき、その気になれば遺伝情報を書き換え、新たな生物をその場に生み出す事もできた。

彼がオーヴァードとして覚醒した数ヶ月前、当初はRV関連者を仰天させた。

彼らは口々に「ありえない」といい、次に西本明という興味深い

サンプルを研究しようと躍起になった。

しかし明とてオーヴァードとなる前は普通の高校生であり、四六時中監禁されて研究されるなどたまったものではない。

そんな彼の現状を理解し、研究者連中を黙らせてくれたのがこの武洪峰である。

彼は一週間に一度だけ支部のラボに来るよう明と約束をこぎつけ、代わりに明へオーヴァードとして異能を用いた戦い方を指導した。

R Vに関わった以上、いついかなる事件に巻き込まれるか分からない。

R VはR Vに引かれ合う、と武は言った。

明とて、もはや異能者。

自分で自分の身を守る程度には、鍛えておかねばならないらしかった。

明が一人前に戦えるようになった時、武は彼にコードネームを贈った。

オーヴァードは皆、裏の顔としてコードネームを持つらしい。

明に贈られたネームは「DTマスター」。

DTとはデータ・トランスフォームの略称で、物質情報を自在に書き換える明の能力を意味するらしい。

そういうわけで、明は色々世話になった武に頭が上がらず、先生と呼ぶのもそのためなのである。

面倒見の良い武がこうしてわざわざ明を呼び出して事件について語るのだから、それはこの先きつと明に関係があるのだろう。

「似てると思わない？ 樹木は立派に『命』ね。少年が逃亡したというF H支部組織は既にもぬけの殻で何の手掛かりも得られなかつ

たが、きつとそこで何かの研究があったね。少年はその被験体だったと思うよ。何の研究だったかは、少年の能力から推測するに――明クン。君の特異な力に、F Hの連中がついに目をつけたね。少年の能力は、君をモデルに改造させられたものかもしれない」

自身の弁髪を弄びながら、武の視線は一時も明から逸らさない。

真面目な話をする時の武の癖であり、明はそれをよく知っていた。「やっぱ、俺の力ってそんなに珍しいんだ」

「珍しいし、強い。使い方によってはキュマイラ（※6）やエグザイル（※7）よりも厄介な力ね。君がその力を使いこなせるようになれば、そこらのオーヴァードが束になっても勝てないよ。今までは明クンの事情を考慮し、なるべく普通の生活を送ってもらってたけども。今後、F Hが君を狙ってくる事が考えられる。――どうするね。戦いに備え、これからはこっちで暮らすとするか？」

武の言葉に明は思案し、首を横に振った。

「いいや、いいよ。そんな、いつ来るか分からない連中の事を考えてもしようがない。それよりかは、来週のテストの方が俺にとって頭が痛いね。まだ勉強してないのに」

武は吐息と共に、弁髪から手を離れた。

「明クンならそう言うと思ってたよ。……ラボの方に、前に話したキカ（※8）を用意させたね。持って行くといいよ」

「……サンキュ、ウーせんせ。偽中国人なのに、色々気が利くね」

「最後の一言は余計ね」

明は陽気な足取りで支部長室を出て行く。

後に残った武は、もう一度溜息をついた。

果たして、これで良かったのだろうか。

解説

※1「久保」

翔と同じく、FH支部研究所で被験体となっている少年。翔と違い、FHの風潮を受け入れているオーヴァード。コードネームは「ヘイル（雹）」。

※2「名前の分からない木の上で」

この植物は巨大に成長したリンデンバウム（菩提樹）である。

※3「西本明」

本編主人公。十七歳、育ち盛りの高校生。モルフエウスと呼ばれる能力を持つが、一般的なモルフエウスと違い有機物や生命体まで合成できるという異能を持つ。そもそも全オーヴァードは生命体を洗脳・操作する事まではできるが、生成する事はできない。その点で、明は非常に特異的な能力を持っている。

※4「武洪峰」

UGN静岡市支部の支部長。自身は気功師であり、シンドロームはオルクス。実は日本人だが、中国によほどの思い入れがあるのか、いかにも自身が中国人であるかのように振る舞っている。

※5「オルクス」

オーヴァードの能力は大別され、その方向性はシンドロームと呼ばれている。シンドロームは現在十二種類確認されている。オルクスもその一つで、自身の周囲に物理法則すら歪める特異的な空間を作成し、優位な状況で事を進める事ができる。

※6「キュマイラ」

シンドロームの一つ。肉体の一部または全部を獣化し、高い攻撃力を誇る。

※7「エグザイル」

シンドロームの一つ。肉体を自在に変化させ、髪・骨・内臓など全てを攻撃に繰り出せる。

※8「キカ」

量子干渉式定性分析器 (Quantum Interference Qualitative Analyzer)。頭文字を取ってQUIQUA。日本語読みでキカと呼ばれる。微粒子上のナノマシンが対象に取り付き、RVをチェックし使用者の神経にリンクしている親機に信号を送る。武が開発させた物で、人に放射する事で相手がオーヴァードであるかどうか、オーヴァードならどんなシンドロームかが分かる。似たような能力を持つ眼鏡が既に存在しているが、こちらの方が相手をより深く分析できる。

1、異能（後書き）

ダブルクロス二次創作、第二弾。

前回のお話は世界観の導入なので、厳密には第一弾ですが。

主人公である明の持つ特殊能力とかキカとか、どう見てもオリジナルです本当にありがとうございます。チートくさいのも愛嬌という事で一つ。

その辺も元ネタあるのですが、つつつかれると非常に喜びます。私
が。

ご意見、ご感想などございましたら虎刈まで。

2、子供

学校の帰り、明はガールフレンドの篠宮悦子しのみやとコンビニに寄っていた。

二人で談笑し適当な物を買った出先、出入り口の正面の男二人に絡まれた。

大学生だろうか、彼らは肩が当たったの当たらないのと文句をつけ、明を路地裏に引き込もうとする。

しかし明は、これから悦子と二人で気ままに下校をするつもりだった。

気分を害した彼は、怖気づく事なく男達を睨みつける。

悦子というと、剣呑な様子に怯えているようだ。

睨み合いはしばらく続いたが、折れたのは男達だった。

彼ら二人は視線を交わすと、踵を返し背後のワゴンに駆け寄る。

「算哲様、お願いします」

雰囲気からして用心棒の先生でも出るのかと思ったが、車から出てきたのは子供だった。

小学生くらいの男の子である。

ただ、爪楊枝を口にくわえた着流しの用心棒より、こっちの方がずっと危険な雰囲気でした。

拳法着のような服に坊主頭といえば、少林寺の修行僧かダライラマの生まれ変わりか。

明の全身に警報が走った。

自分と同じ匂い——RVの匂いがしたのだ。

明が検出したのは、この子供から放射されるRVだ。

子供は自身をFHチルドレンの久保算哲と名乗り、こちらに確認を求めてきた。

「西本明、だね」

「……そうかもな」

「君は、情報によれば、今までにない能力を持ってるらしいね」

「へえ、それは初耳だ」

とぼけている最中でも、明は逃走の算段を考えていた。

ここは街中であり、算哲も派手には動けないはず。

先の子分と思しき男達は、ワゴンの中から様子を窺っている。

悦子を連れていたのが悔やまれた。

武から忠告を受けた昨日の今日で、まさか本当に向こうからやって来るとは。

しかし幸いな事に、今すぐ害を加えるつもりはないらしい。

久保は、明の態度にイライラしていた。

「……どうしてそういう態度を取るかな。僕だって楽しくてやってるわけじゃないぞ」

「じゃあ、やめれば？」

「やめる？ 誰が一旦なったオーヴァードをやめられるんだよ。鬼ごっこの鬼じゃないんだぞ。そう簡単になったりやめたりできるわけないだろ」

ただの会話の応酬のつもりだが、案外相手が乗ってきた。

うまくいけば、冷静さを失わせられるかもしれない。

ついでに、この後に予想される戦闘を考慮し、自身の所持する生

命体のデータの検索を開始する。

その時間稼ぎとして、もう少し会話を試みた。

「……何だ？ オーヴァードでなくなる方法、知らねえのか。じゃあ教えてやろうか？」

「別に」

「知りたいんじゃないのか？」

「知らなくていいよ、そんなの」

「そうだなあ。……俺を倒したら、教えてやってもいいかなあ」

「——知らなくていいって言うてるだろ！」

算哲は突然激昂した。

顔面から気を放つような勢いで、声と同時にワーディング（※1）、そして冷気を放射した。

とっさに回避したが、さっきまで明の頭のあった空間が、急激な冷却に煌いていた。

身を切るような冷気で、顔がひりひりする。

「挨拶は終わりだ。……死ぬのは君の方だからな」

周囲の一般人は、悦子を含めワーディングで昏倒している。インセント

たちまちはこの戦いを目撃される心配はないが、人通りのある場所だけにいつ新たな目撃者が出るか分からない。

早々に決着をつける必要がある。

まず第一手。

明は先程の会話の間に体内で合成していたキカを完成、放射した。微粒子状のナノマシンが相手の体を検査し、その情報を直に明の神経が受け取り、理解する。

算哲のシンドロームはサラマンダー（※2）、それも冷却に特化した能力を持っている。

近く中距離型の戦闘スタイルであると想定。
ならば、明自身は距離を保ちつつユニットをけしかけるのが無難か。

まずは、算哲との距離をあける必要がある。

キカに続き、明は次なる合成を開始した。

昼に食べた牛丼の未消化分に、自分の贅肉を足す。

肉は食道を途中まで逆上、口腔内から来たRVと合流する。

ここからが難しい。

食道の壁に穴を開け、肉を穴から外に絞り出す。

そこから目的地の前腕まで、真皮と体組織の間を空けてトンネルを作る。

今度はそのトンネルの中に肉を通していく。

鎖骨の辺りを未消化の肉が通っていくのだが、元々人間の筋肉は
そのように作られていない。

しかし今までの訓練の賜物で、これくらいは0.4秒もあればこなせる。

最後は前腕にコブのように溜まった肉の遺伝子を操作し、酵素を
活性化させる(※3)。

できたら皮膚に穴を開け、完成した生命体を袖の中に出してやる。

知らない者が一連の動作を見れば、明のことを手品師と見た
ろう。

もっともこれは種などない手品であり、飛び出した生命体は明の
手足のようなものだ。

「――ヘラクレス、二体」

袖から飛び出したのは、二匹の巨大なカブト虫(※4)。
頑健な顎を持つそれらは、一目散に算哲に飛びかかった。

「……それが、『DTマスター』と呼ばれる所以か！」

算哲の手から、強烈な冷気が迸る。

急速に気温が低下し、二匹の内一匹は活動を停止した。

しかし残るもう一匹は冷気を潜り抜け、算哲の腕に食らいつこうとする。

「——くそっ！」

それを算哲は腕表面に巨大な氷の盾を展開し、防ぐ。

一旦阻んだヘラクレスを今度は逆の手で捉え、ヘラクレスから直接体温を奪い絶命させた。

算哲がヘラクレスに戸惑っている間、明は街路樹の側に移動していた。

街路樹に触れ、内部にRVを浸透させて物質を作り変える。

ゼリー状に街路樹は崩れ、溶け合い、新たな命へと生まれ変わる。

「次は、オオカミ」

アラスカオオカミ、それも三体だ。

生体情報はRVが教えてくれる。

アラスカオオカミ、どれも三歳の若いオス、毛色はチャコールの黒。

街路樹がオオカミ達になるまでは丸二秒かったが、合成開始一秒後には走り出していた。

算哲はというと、向かい来るオオカミ達を前にこの状況はマズいと判断していた。

こちらが明の作り出す生物にてこずっている間に、奴は次から次へと生物を作り出す。

消耗するのはこちらだけ、それでは勝てない。

この循環を断ち切るためには、本体を叩く他にない。

「……くっそおおっ！」

三体のオオカミをかわし、何とか明を射程距離にまで捉える。

そして、冷氣により無数の氷つぶてを放った。

一発一発が銃弾の威力に匹敵するそれらは、確実に明の体を貫くはずであった。

逃げ場は無い。

しかし、明には逃げる準備ができていた。

あたかも学生服を着た人間のように見えるが、明の肉体は一万匹のスズメバチへと変態を遂げていたのだ。

最初の氷弾が耳の上を貫通すると、その体は風船のように弾けた。自家製ポップコーンの袋を破いたときのように、明の皮膚の中からスズメバチの大群が飛び出した。

ウンカのようなハチの大群は、微妙に人のシルエットを残したまま、そのまま建物を登っていく。

必死に撃っていた算哲は、何が起こっているのか一瞬呆気に取られた。

やがて事態に気付いた彼は、急いでオオカミを始末し、ハチの後を追う。

しかし明本体に攻撃を集中しすぎたため、オオカミ達の牙によって算哲は右足と左腕に大きな損傷を負っていた。

「……何てやっかいな力なんだ……！」

体内のRVを活性化し、算哲は傷の治療を行なう。

リザレクトと呼ばれるその行為は便利なようであるが、多用すると自身のRVを制御できなくなり自我消失の恐れもある、諸刃の剣なのだ。

RVで強化された身体能力と氷による足場で、算哲は明を追い続けた。

一方、明も無傷だったわけではない。

ハチのうち約1割が撃墜され、消耗していた。

減った分の体重は、どこかの建物の屋上にある観葉植物から補う。体はほぼ完璧に修復されるが、明は、貯えていた情報の一部を永久に失った。

保険が四重だったので、損失は全体の一万分の一だ。

明は幼稚園の運動会の綱引きの時の記憶を喪失し、駅の構造、江口洋介主演のドラマのタイトルを忘れた。

観葉植物に群がったスズメバチは約一秒で固まり、再度明の姿が現れた。

明は間髪入れず、近場の給水タンクに口から出したRVを放射する。

給水タンクはもぞもぞと床を流れ、溶け合って泥状の波紋となり拡散していく。

そこへ丁度、算哲が現れた。

「……逃げ足だけは、早いだね」

「生憎と、俺は喧嘩が嫌いなんでね」

「よく言うよ、あんなのけしかけておいて。でも、もう逃がさないよ。この建物の周囲には、氷の結界を張った。もし逃げようものなら、足が凍り付く。またハチになっても、今度は全部凍らせる。一対一なら、僕の勝ちだ」

勝ち誇った算哲は、笑みを浮かべる。

子供には似つかわしくない、残虐な笑み。

それは強者にのみ許される、獲物をいたぶる笑みだった。

獲物である明はというと、そんな算哲を見てこれまた笑みを浮かべる。

「……FHの奴にはロクなのがないって、本当だな。センセから聞いた、勅使河原って子の方が珍しいらしい」

その名を聞いても、算哲は微動だにしない。

「ああ、アイツの事か。アンタの能力を手に入れようとした科学者連中の、被験体となったんだ。新たな力が手に入ろうとしていたのに脱走した、馬鹿な奴だよ。そう言えば、とどめは僕が刺したんだ。実に痛快だったね、弱い奴は死ねばいいんだ」

「どいつもこいつも力、力って……。お前達、何様のつもりだ？」

今更何を言ってるんだ、と算哲は肩を竦め、ようやく笑い止んだ。

「僕達はオーヴァードイノセントという名の超人さ。分かるかい。羊と狼が違うように、一般人と僕達は別の存在なんだよ。強い者が弱い者を殺す、生殺与奪の権利を握る！ 君にこのシンプルさが分かるか！ これこそが生命の理、自然界の掟だよ」

それは、暗に自分が人間じゃない、と認めているものだと思は思う。

そんな考えは腹が立つ。

なぜなら、明は自分がまだ人間だと思っているから。

オーヴァードとなっても、人間として暮らしていたい。

この異能とは共存できるはずで、振り回されるべきものじゃない。その信念を貫き通すため、明は算哲の言葉を認めるわけにはいかない。

「俺は人間は殺さないつもりだけど、お前違うんだろ。超人だっけ。何それ？ サルの延長線上みたいなのか？ 進化ご苦労様だったな」

「何言ってるんだい。お前も僕と同じ、オーヴァードだろ？」

「一緒にすんな。命ってのは重いんだ。たくさん命を扱う俺は、そこんとこの線引きをしっかりとしない。……さてと、お喋りはここまでだ。これ以上お前と会話を続けると、イライラする。

少し黙って、

ついでに動きも止めてもらおうか」

「な——？」

明を追い詰めたかのように見えた算哲だが、罨にかかったのは彼の方だった。

不意に屋上の床が柔らかくなり、算哲の足はそのまま沼と化した床の中に沈んでいった。

擬態した昆虫が餌を前にして突然動き出すように、灰色の泥はにわかになを受け、蠢き、算哲の体表を上向きにどろどろと流れた。

右足を抜こうとすると左足が沈む。

左足を抜こうとすると右足が沈む。

文字通り泥沼に陥った算哲の体は、見る間に生けるセメントに覆われていく。

そしてそのセメントは、本当にあつという間に固まった（※5）。

いくらオーヴァードとはいえ、算哲は子供だ。全身を超硬質セメントで覆われれば、手も足も出ない。

算哲が動けなくなったのを確認した明は、周囲の冷気が急速に拡散していくのを実感しつつ、セメントの彫像に向き直った。

「逃げ道さえ塞げば、俺に勝てる。その見通しの甘さがお前の敗因だ。分かるか？ ……ああ、そうだ。戦いの前に言ってたな、オー

ヴァードでなくなる方法。簡単だ、死んでしまえばオーヴァードも一般人もない。ただの子供になれるぜ、算哲君」

算哲は口の周辺、塞がれていない部分をひくひくと動かし、かろうじて呼吸していた。

明の言葉を理解している可能性は低い。

「さて、俺は人間は殺さないと言ったが——お前のような奴だって、

殺したいとも思わない。……お前を裁くのは俺じゃねえ、別の誰かだ」

算哲が力を失った事で、ワーディングが切れ始めている。

周囲の惨状が一般人の目に触れる前に、武に連絡を取って事後処理をしておおう。

その後は、下で眠ったままの悦子の介抱でもするのだろうか。

解説

※1 「ワーディング」

オーヴァードが誰しも持っている能力で、活性化したRVをフェロモンのように放出し、RVに耐性のない者達、つまり一般人を気絶させる。気絶させるだけでなく、記憶を曖昧にしたり無力化させたりと、その効果は実に多様。オーヴァードが異能を使う時は、大抵このワーディングで目撃者を作らないようにしている。

※2 「サラマンダー」

シンドロームの一つで、高熱と冷気を操り攻撃する能力。算哲は特に冷却能力に優れている。

※3 「肉の遺伝子を操作し、酵素を活性化」

明が生命体を作り出す過程は謎が多い。本人も無意識的に行なっているために、ますます謎めいている。しかし研究者の仮説の一つに、明の保有するRVが大量の生体情報を抱えているという説がある。数百万のRVと、同数の生体情報RNA鎖が対象の生体情報を変化させ、RVが酵素の働きを促し、あるいは自然界にない酵素を設計・生成し、対象を目的の生命体に変化させるのではないかというものである。現在はこの説が有力であり、FHもこの説に則って

人工のナノマシンを用いてRVに改変を加え、勅使河原翔の能力を開発した。

※4「巨大なカブトムシ」

ヘラクレスオオカブトムシ。拳ほどの大きさで、強い顎の力を持つ。数を成せば脅威。

※5「あつという間に固まった」

セメントハーデン。対象を瞬間硬化セメントで固めるトラップ。生半可な力ではこれを壊せない。

2、子供（後書き）

いきなり戦闘でした。

超能力者同士の戦いは書いて楽しいのですが、第三者にはイメージしづらいので描写を丁寧にしようとしています。

今回の戦闘とかも分かる人には分かる元ネタ盛りだくさんなので、指摘がいつ来るかとヒヤヒヤしつつワクワクしつつ。

私は、ネタの扱いについて意図的にばらすか巧妙に隠すかの二通りを主としているので、巧妙に隠した場合（つまりバレてほしくない場合）にバレた時の気恥ずかしさったらないね！やっほい！

ご意見、ご感想などございましたら随時お待ちしております。

3、覚醒

今日は、殺さなくて済んだ。

自宅のベッドの上で、明はそう考えた。

身を守るためには、戦わなくてはならない。

でも、人を殺せばそれだけ日常からずれていく。自分が化物だと認めることになってしまう。

「……俺は、人間だ」

確認するように呟いて、明はベッドに身を沈めていく。

[illegible]

あの日。

明は恋人と共に、遊園地を訪れていた。

彼女の名前は、――。

互いに相性も良く、彼女というだけで明は幸せだった。

しかし、日曜の遊園地に相応しからぬ、殺伐とした雰囲氣の男がいた。

外人で、それも米兵のようだった。

ベンチに座り、行楽客に思いっきりガンを飛ばしており、順当に

明とも目が合った。

男はF H所属エージェント、グレン・ドグスター（※1）と名乗った。

左手からR Vをわざと放射し、自分がオーヴァードである事を明らかにした上で。

当時、明はR Vを巡って日常の裏で攻防があったとは思ってもみなかった。

そもそも、R Vすら知らなかった。
ただ、オーヴァードとして目覚めかけていた彼は、ドグスターの放射したR Vを感覚的に理解できた。

ドグスターは英語で語りかけた。

「俺の目的は、最近この周辺で放出されるR Vを持つオーヴァードの搜索だ。ようやく見つけたぞ、お前がその張本人だな」
突然に言われても、何が何だか分からない。

明は――を背後に庇い、この男と対峙する。

幸い、明は英語を話せた。

「一体、お前は何を言ってるんだ。悪いが、人違いじゃないのか？
俺はただの、善良な一般市民だぜ」

「……どうやら、俺達は話し合う必要があるな」

会話が英語だった事もあり、――には全く理解できなかった。
「ねえ、知ってる人？ 絡まれてるの？」

――を巻き込むわけにはいかない。

そう思った明は、ドグスターを彼女から引き離す事を考えた。

「……いや、少し違う。悪いけど俺、今からこの怖い外人さんと話

があるから。ちょっと待っててくれる？」

「え？ そんな……」

「ごめん。後できちんと説明するから。大丈夫、きっと無事に戻るよ」

「……………」

——はいまいち納得してない様子だったが、明の目が真剣なのもあって、結局彼女は無言で承諾してしまった。

明はベンチに彼女を座らせると、ドグスターへ向き直った。

「言っておくが、彼女は無関係だ」

「理解した。彼女に手出しはしない」

二人は遊園地の奥の方、お化け屋敷の洋館の脇の方へ向かった。

「お前は今、無意識にRVを放出している。それだけならただの未確認オーヴァードなのだが、そのRVが特異な形態をしているらしい。FHとして、これを見逃すわけにはいかない。RV検出による追跡で、お前が今日この遊園地に入ったのは分かっていた」

ドグスターは、RVについて一通り説明する。

人に人ならざる力を与えるウイルス、そしてその力を巡ってのUGNとFHの攻防。

突拍子のない、しかし信憑性に溢れたドグスターの話に、明は納得するより他はなかった。

「——そこまで言うんなら、俺がオーヴァードとして目覚めかけてるってのは本当なんだな」

「ああ。……それで、お前はどちらの組織に属する？ UGNか、我らがFHか」

ドグスターが一番確認したいのはここだろう、と明は思う。

ここは慎重に答えねばならない。

「まだ決めてねえよ。その話、今聞かされたばかりだし。アンタの話は信じるけど、全部を話したとも思えないしな」

「FHには悪評も多いが、それだけ自由だという事だ。……FHに、

入る気はないか」

ドグスターの視線は、こちらを見たまま一時も離れない。まるで、明の全てを見定めているかのようだ。

この場の名言は避けるべきだ、と咄嗟に明は判断した。

「――ドグスター。アンタは、何でFHに組している？」

「……俺は、UGNの連中に何人も友達を殺された。奴らが憎い」意外だった。

この殺気の塊のような男も、戦うための理由はまともなものらしい。

「じゃあ、アンタはその復讐のためにUGNと戦っているのか？」

「それもあるが、死んだ者は蘇らない。……そうだな。強いて言えば、金のためだ」

「金？ 他にないのか？ 俺はそこまで割り切れないな」

「……若いな。お前には戦う理由があるのか？」

突然に言われ、明は困った。

戦う理由と言われても、明には思いつかない。

「……俺には分からないよ。自分の戦う理由が、思いつかない」

もしこの時、他の受け答えをしていたらどうなっていただろう。後になって、明は何度もそう思った。

ドグスターは明の答えを聞き、ずっと目を閉じた。

「……そうか。だとしたら、俺とお前は戦う事になろう」

ドグスターは深呼吸し始めた。

RVが活動を開始するのが分かる。

ドグスターを中心に、ワーディングが広がっていく。

「なぜだ？　なぜアンタと俺が戦う必要がある！」

「戦わない理由がないからだ。至ってシンプル。お前が金や言葉で動かない、戦うしかない人間だからだ！」

ドグスターは近場の街灯を機関銃に変換し、明に突きつけた。
モルフエウスの能力である。

「俺は以下の命令を受けている。件のオーヴァードがFHに理解を示し、協力するなら確保せよ。そうでないなら、今後のFHの活動の障害となる可能性ありとし、排除せよ……と」

言葉と共に放たれる銃弾。

その何発かは明を貫通し、彼は大地に倒れ込む。

そして同時に、背後の茂みからも悲鳴が聞こえた。

その声は、明にとって聞き間違いのようなものだった。

「……まさか、——？　——なのか！」

痛む体中を引きずって、茂みの方へ足を運ぶ。

するとそこには、明にとって一番見たくない人物、——が血まみれの姿になって横たわっていた。

既に彼女は事切れており、明が呼んでも揺すっても返事をしなかった。

その様子を見て、ドグスターは言った。

「……不運な事故だな。彼女に手出しをしないつもりでいたが、ワーディングをいかくぐってお前の後をつけていたらしい。その精神力の強さが、仇になった。大人しく待っておれば、死なずに済んだものを」

その言葉が、明にとって引き金となった。
体の奥底から湧き出る怒り、無力感、絶望、悲哀、様々な負の感情が彼を支配した。

そして、無意識の内に求めるものは力。

力こそあれば、こんな結果にはならなかった。

——を守る事ができた。

こんな男に屈する事はなかった。

力さえ、あれば。

その時、そんな彼に応えるものが、彼自身の内に存在した。

『……力が、欲しいのか』

欲しい、心の底からそう思う。

『力が欲しいなら、くれてやる』

その声に促されるまま、明は立ち上がった。

いつの間にか、体に負っていた傷は癒えている。

ただ頭にあるのは、ドグスターへの復讐。

それのみに特化した思考は、この状況において的確な判断を下し続けた。

ドグスターは、街灯を機関銃に変えた。
なら、自分にも同じ事ができるはず！

なぜそう思ったのかは分からない。

けれど、そうできるという確信があった。

明は地面に手をかざし、強く思念する。

鉄分、ニッケル、チタン、どれも分量・合成に問題なし。

形状は鋭いのがいい。

あの憎い男を一刺しにできるくらいの物。

そうして、明の望むままに彼の手には一本の刀が握られていた。

「……女の死に、覚醒したか。だが、結果は同じ事。同じモルフェウスならば、経験の多い俺の方が上と知れ！」

ドグスターから再び放たれる銃弾。

それを、明は自身の服を防弾チョッキに練成する事で、致命傷を避けた。

多少の傷は、RVが直してくれる。

今はただ、体が満足に動ける程度の機能さえ保てればいい。

前に、前に、前に。

この武器の射程内にドグスターを捉える。

鬼神の如くドグスターに駆け寄った明は、憎き敵へ必殺の一撃を叩き込む。

しかし敵もさるもの、とっさに背後へと飛び距離を取った。

……が、攻撃を避けたはずのドグスターの腹部には、刃による傷痕があった。

「――練成した刀を更に練成し、刀身を伸ばしたな。……もはや、

この数分で能力を使いこなし始めたか小僧。やはりお前は、始末せねばならん」

そう言って、ドグスターは脱兎の如く駆けだした。

行く先はすぐ側の公衆便所。

彼は公衆便所の建物の上に立ち、両手をその壁にかざした。

すると飴細工のようにコンクリの壁が融解し、あっという間に別の物質へ作り変えられる。

ドグスターもその中に包まれ、彼を守るように新たな外観の武装が完成した。

瞬きする間に公衆便所はキャタピラと巨大な砲台を持つ、戦車へとその姿を変えていた。

「――自動装甲車フランベルク（※2）。この火力からは逃れられんぞ」

明は目前の戦車を前に、考えていた。

あの戦車の砲撃に耐え得る防具を作る余裕はない。

ならば、こちらも戦車級以上の兵器を作り出すか。

――しかし、手近な無機物が見つからない。

ここから近い巨大な質量を持つ無機物はお化け屋敷だが、そこまで移動している間に敵の攻撃を受けてしまう。

地中の無機物をかき集め、変性させるには時間と質量が足りない。

――ダメだ、無機物じゃ間に合わない！

このままでは負ける。

そう咄嗟に判断した明は、もっとも手近のまとまった質量――明の恋人に、手をかざす。

「――貴様、何を……！」

無機物がダメなら、有機物を。

とにかく何でもいい、ドグスターに勝つためなら手段を選ばない。

能力の限界を超えた能力、物質を変換するというモルフェウスの根幹、その起源にまで遡る。

明の中で、再び応える何かの声。

『力が欲しいなら、くれてやる』

明の内に凄まじい勢いで流れ込んでくる生体の情報量。

幾多の命の、『真の名』とも言うべきものを理解していく。

明が強く思念しただけで、その生体を構成できるという確信が生まれた。

しかし、その代償に。

明はこの瞬間より二度と、彼の恋人である——の名前を認識できなくなった。

——は、明の力により新たな生命へと生まれ変わった。
逞しい筋肉と鋭い牙を持つ、二体の獣へと。

「ヒョウ。ジャワヒョウが二体」

「何……！」

弾丸のように走り出す二体の猛獣。

その俊敏な動作に、戦車の狙いが定まらない。

そのままヒョウ達は、戦車に体当たりを繰り返す。

一発一発は大したダメージではないものの、連続して当たり続けると稼動部の損傷が蓄積し、動作不良を起こす可能性がある。

しかし、ただドグスターも殴られ続けているわけではなかった。

フランベルクを稼動させ、そのまま明へと突進する。

明はこれかわし、射線の通りづらい茂みへと身を隠す。

もちろん、それはドグスターも計算済みだった。

彼の真の狙いは、ヒョウを振り切りお化け屋敷へとそのまま突貫する事。

大きな音を立てお化け屋敷に突っ込んだ戦車は、お化け屋敷も含み再び泥状へと変化した。

新たな練成、それも今度は巨大な質量を伴ったものである。

「巨大装甲車グレイシア（※3）。これならば、獣が何匹いようと変わらんぞ」

先の戦車の2倍はある、まさに歩く砲台といった巨大装甲車が誕生した。

小手先の敵は機関砲台で、中々遠距離の敵に対してはメインのミサイルが迎撃する。

特に恐るべきなのはその巨大な質量を生かした体当たりで、この戦車の突進に耐え得る生き物はおらず、対抗できる装甲車も数える

程しかない。

この巨大な相手に対し、明はしかし動じない。相手がデカブツならば、こちらもデカブツを。

ここの茂みは草木が豊富で、総量ならグレイシアに負けてはいない。

明は先程作り出したヒョウを練生物に戻し、辺りの樹木も含めて目的の生物を作り始める。

骨格系はイグアナを参考に、消化器系は必要ないので省略。

リン、ケイ素は問題なし、たんぱく質の不足はチタンで代用する。シミュレーションではうまくいくはずだが。

『どうした、明。お前は、こいつの名前を知っているはずだ——』

内なる声に促されるまま、明はその名を唱えた。

「……これだ。アロサウルス！」

Tーレックス（※4）とも呼ばれる、ジュラ紀の王者が生まれ出た。

この獰猛な肉食恐竜は外見に見合わぬ瞬発力を持ち、合成開始2秒後にすぐグレイシアへと突撃した。

対し、グレイシアも応戦する。

保有する最大の火力を以ってアロサウルスを打ち落とそうとするが、そもそもこの手の装甲車は対人・対軍用の兵器であり、俊敏な動作を持つ巨大な相手には相性が悪い。

アロサウルスは瞬く間にグレイシアへと接近し、砲門を体当たり

で打ち壊した。

「――ガアアアッ！」

本能の赴くまま破壊を続けるこの恐竜は、破壊したハッチの中にいるドグスターを発見した。

彼は機体内にいたため激しいダメージを受けており、すぐにはこの恐竜から逃げられない。

「……化け物め」

そう言い残すのが、精々だった。

その言葉は、目の前の恐竜に向けられたものか、明自身に向けられたものか分からない。

ドグスターはそのままアロサウルスに上半身をかじられ、大きく振り回された。

数分が経過した。

アロサウルスからダメージを受け続けたドグスターは、RVによる再生が追いつかず死亡した。

死の間際に、明への言葉を残して。

「お前は強い。それがお前の、戦う理由だ……」

UGNエージェントが駆け付けた時は全てが終わり、被害を抑えるためにアロサウルスを明が分解した後だった。

しかし、もはやそれはどうでも良かった。

明は彼にとって最も大切な人を、永久に失ったのだから。

明は目を覚ました。まだ夜半であり、全身にじつとりど嫌な汗をかいている。

嫌な夢を見た。

あの日以来、明は時々この夢により目を覚ます。

明は嫌な夢を振り払うように首を振り、再び布団に包まった。

いっそのこと、自殺してしまおうか。

明はそう思う。

こんな自分など、生きてる意味がないのではないか。

このままR.Vの温床となつて生き続けるよりは、いつその事自殺して全ての苦しみを忘れてもいいかもしれない。

しかし同時に、体内から一斉に非難の声があがる。

曰く、UGNとFHの戦いはまだ終わっていない。

人間とRVは共存している、損はしていない。

明が死んでも、R・Vが死滅するわけではない、それくらいならR・Vの研究を続けるほうがマシではないか。

この声がRVによるものか、明自身の願望なのか分からない。

そして結局、明は自殺を止めた。

生への渴望に負けたのだ。

彼は再び、夢の世界へと旅立って行く。

そんな彼に、傍らに立つ誰かの優しい声が聞こえた気がした。

『それでいいの、明君。日常に生きようという希望を捨てないで。あなたならきっと、幸せな未来を掴めるから——』

翌日、明は眠い眼を擦りながら登校していた。

登校中に悦子や友人達と挨拶しながら、授業開始に間に合うよう小走りに急ぐ。

一限目は、小うるさい須藤だ。

このペースなら3分前には間に合うな、と明は思った。

今日も、空が青い。

おしまい

解説

※1 「グレン・ドグスター」

FHエージェント。グレン・ドグスターはコードネームであり、

本名不明。ドグスターはシリウスを意味し、FHの命令を忠実にこなすエージェント。シンドロームはモルフェウス。

※2「フランベルク」

FHが開発したR型自動装甲車。操縦者の神経とリンクし、目標を的確に捕捉する。武器は突進、火炎放射器。

※3「グレイシア」

歩く要塞とも呼ばれるG型巨大自動装甲車。重量380t、整路なら最高130km/hで走行する。機関砲台、ミサイルを武器とする。ただし燃費が悪く、稼働時間は30分に満たないため実用性に欠けるとFHでは使用を見送られた。グレイシアとは氷河の意で、この車両が隘路で両脇のビルの側面を削る点を、U字谷の形成過程になぞらえて命名された。

※4「Tーレックス」

ティラノザウルスともいう。巨大な外観に似合わず、強靱な脚力で大きな瞬発力を誇る肉食恐竜。

3、覚醒（後書き）

さしたる強い感動もなく、さりとして喜びもなく。

過去の悲しみを背負いながらも、日常は淡々と続いていく。

私の描くダブルクロスのイメージはこんな感じですよ。異能を持ってしまった人間の末路って、そんなものだろうなど。

ヒロイックな展開もいいですが、それだどことなく嘘臭く感じるのは私だけでしょうか。ご都合主義が肌に合わないといえますか。例えばダブルクロスでいうとUGNだって綺麗事だけでやっていくはずない（と私は思う）ですし、FHだって彼らの信義に基づいて動いているわけでただの「悪の集団」じゃないはずですよ。UGNとFHが争っている以上、互いに殺し殺されは当たり前。その辺ドグスターさんで描写しましたが。

主人公の明だって、失った恋人の喪失感を少しでも埋めようとガールフレンド作ってみたりしてますし、はたから見ると「冷たい奴」と言われようが本人は日常に生きようと必死なんですヨ。そんな人間くささが好きです。

愛？友情？話せば分かり合える？世界は希望で満ちている？

——闇に生きる彼らは、そんなもの鼻で笑い飛ばしちゃうでしょうね。少なくとも、私の作品の中では。

……そして思うのです。やっぱり私は捻くれ者だと（笑）

この話で自動装甲車の話が出ましたが、戦車とかに詳しい人の話を聞くと「戦車に火炎放射器積むとか引火して危険すぎるわー」と非難受けましたが、そこはそれ。FHとかRVとかの超科学力という事で納得してください。

ビバ！超科学！作者の無知を適当に補ってくれる素晴らしい！

最後になりますが、これはダブルクロスの二次創作であり、本家を

非難するものでは決してございません。あくまで「私から見ただブルクロス、しかもオリジナル設定加味verでございます。」

ですので、ダブルクロスのファンの方々もそうでない方も、その辺の事情を考慮して読んでいただければと思います。

つまり、気に食わない描写や世界観は全て「ダメだこいつ（||虎刈）……早く何とかしないと……」という目で一つー。

ご意見、ご感想などございましたらお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4201i/>

ダブルクロス ～明の憂鬱～

2010年10月9日09時10分発行